

OPIC導入による スピーキングに対する 意識変容の分析

金丸 敏幸 (京都大学)

八木 智裕 (NECマネジメントパートナー)

大久保 雅司 (NECマネジメントパートナー)



研究の背景

- 四技能への関心の高まり
 - 文部科学省
「グローバル化に対応した
英語教育改革の五つの提言」
 - 高校卒業時に、「聞く」「話す」
「読む」「書く」の4技能を使える英語力
を身に付ける

「話す」能力の実態

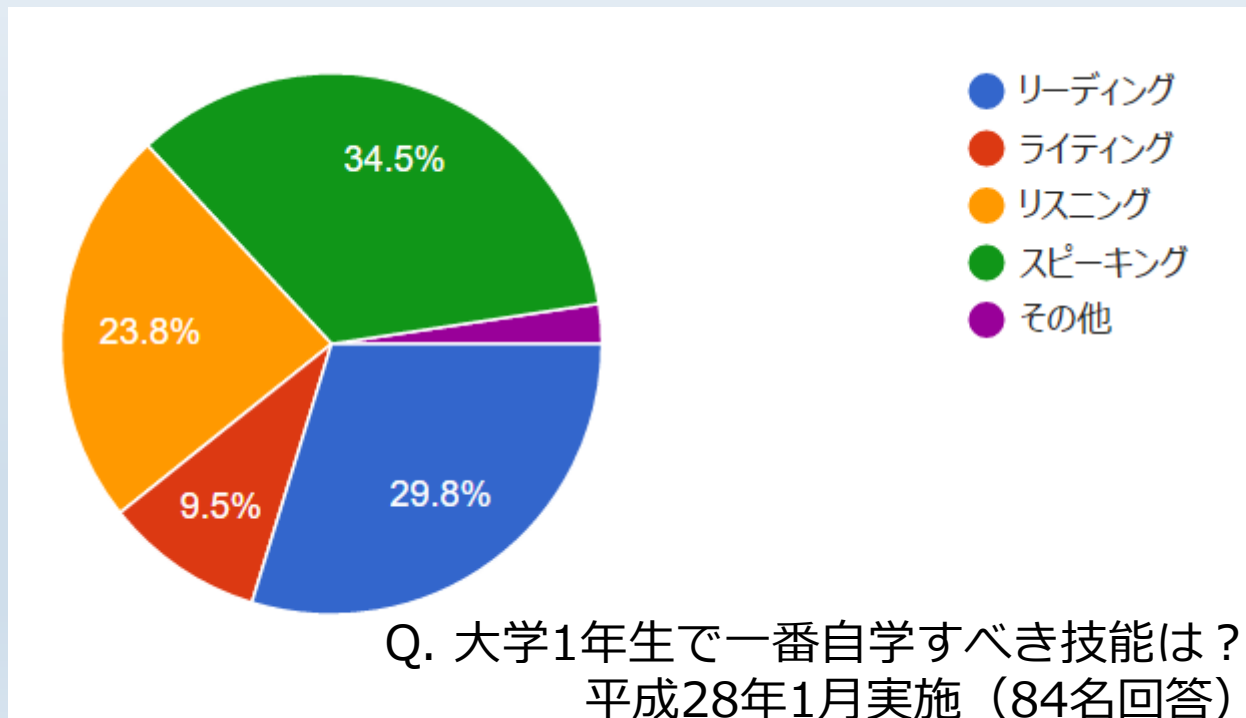
Speaking		平成26年度		平成27年度	
CEFR	得点	人数	割合	人数	割合
B1	14	166	1.0%	211	1.2%
A2	13	193	9.5%	239	9.8%
	12	330		390	
	11	418		422	
	10	559		611	
A1	9	621	89.5%	748	89.0%
	8	718		905	
	7	898		1026	
	6	1143		1168	
	5	1602		1569	
	4	1085		1028	
	3	1629		1601	
	2	1444		0	
	1	2816		3918	
	0	2210		3149	
	平均	4.2		4.3	
	調査対象	15,832		16,985	
	0点	2,210	14.0%	3,149	18.5%

「話す」能力の実態

- 高校生の英語力調査（平成27年度）
 - 全国の高校3年生約2.2万人を調査（1校あたり1クラスを対象）
 - 約9割の生徒がCEFRの**A1相当**
 - 0点は18.5%（3,149名/16,985名）
 - 「話すこと」のスコアが高いほど、「英語学習が好き」という回答

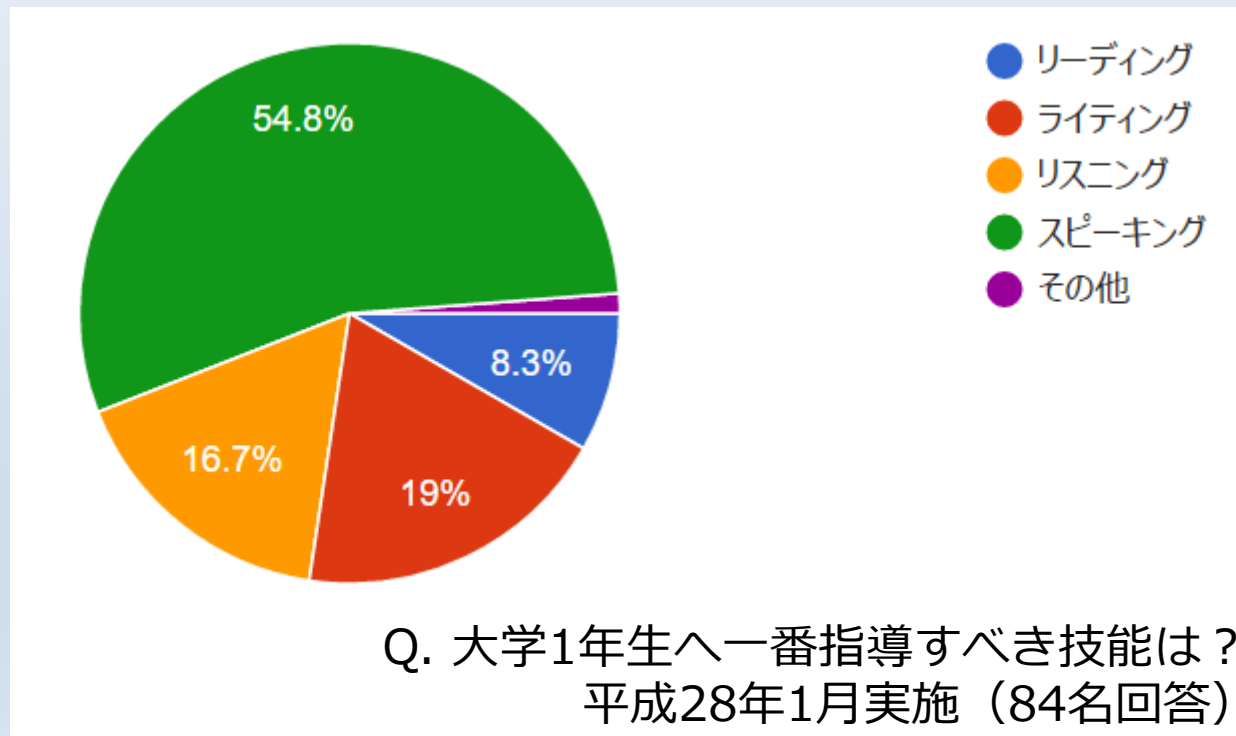
スピーキング学習への関心

- スピーキング学習への動機付けは高い



スピーキング学習への関心

- スピーキング学習への期待も高い



しかし実態は……

- スピーキングクラスの希望率は低い
 - 動機付けの強い学生は選択するが、そうでない学生は避ける傾向
 - 積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢は低い
- スピーキングクラスでの動機付けの維持の難しさ

スピーキング学習と動機付け

- 田中（2010）

- スピーキング学習の動機付けを高めるには、有能性と関係性の欲求を充足させることが重要

- 関谷（2009）

- 英語を完全に習得しようとする英語観を持つと発話に得意感を感じ難くなる

英語能力の自己認識

- 自己認識として、英語を「話せる」という認識を持たせるのは難しい
- 現状の英語能力と、求められる英語能力の認識のズレを見ると、100%の学生が、現状では求められる英語能力を有していないと判断

スピーキング能力の測定

- 外部テストによる客観的指標の提供
 - TOEFL iBT
 - TOEIC S/W
 - IELTS
 - Versant
 - OPIc

OPI c とは

- OPIc: **O**ral **P**roficiency
Interview by **C**omputer
 - 評価レベルは、ACTFL Speaking Guideline 2012 に従う (Level 1~7)
 - 評価要素は、**言語タスク遂行能力**、**文章構成力**、**状況に合わせた表現力**、**質問意図の把握能力**、**文法・語彙・流暢さ・発音** (≒CAF)
 - これらの**総合評価 (holistic)**

OPICでのレベル

Level		言語能力
Advanced	Low	自分の考えや経験を流暢に表現できる。討論や交渉、説得など実際の業務で駆使することができる。
	High	文法的に大きな間違いが無く言語を駆使し、基本的なビジネスや会議でコミュニケーションができる。
Intermediate	Mid 1~3	小さな文法的ミスはあるものの、長いセンテンスを駆使し、基本的なコミュニケーションができる。
	Low	日常的な話題はセンテンスで話すことができる。会話に参加し、興味のある話題は自信を持って話すことができる。
Novice	High	簡単な単語や句を駆使してコミュニケーションができる。
	Mid	既に暗記している単語やセンテンスで話すことができる。
	Low	限定的ではあるが、単語を羅列して話すことができる。

日本でのOPIC実践

- 東京大学工学部（2015, 2016）
- 青山学院大学（3年生, 4年生）
- 関西大学, 摂南大学, 法政大学, 長崎県立大学, 千葉大学, 実践女子短期大学, 西九州大学, 神奈川大学等の大学で約750名の受験者

OPI cの実施手順

1. バックグラウンドサーベイ
 2. セルフアセスメント
 3. 試験実施
 - A) 質問の聞き取り（2回まで）
 - B) 回答の録音
- ※ 問題数は12～15問（最大40分）

調査概要

- 参与者：京都大学1回生（99名）
（工学部：70名，農学部29名）
 - 実験群：工学部37名(A)，農学部29名(B)
 - 統制群：工学部33名
- 調査時期：2015年4月～7月
 - OPIc受験：1回目 4月，2回目 7月
※ それぞれでアンケートを実施

実験群と統制群

- 実験群（66名）

- 1回目のOPIc 受験後に、1ヶ月の
 - ・ Webによるe-Learningの受講 と
 - ・ Skypeによるオンライン英語指導を実施した

- 統制群（33名）

- スピーキングの自己学習を指示のみ

自己評価アンケート

■ 2項目について質問

1. リスニングとスピーキングの「得意－不得意」のマトリクス
2. 現状の英語力レベルと、将来、必要になるとと思われる英語力レベルのマトリクス
※レベルについては、OPIcのレベルを基準とした

OPICの結果

クラス	1回目		2回目	
実験群A	IM以上	4	IM以上	<u>9</u>
	IL	18	IL	18
	NH以下	15	NH以下	10
実験群B	IM以上	9	IM以上	<u>12</u>
	IL	14	IL	13
	NH以下	6	NH以下	4
統制群	IM以上	4	IM以上	<u>5</u>
	IL	13	IL	15
	NH以下	16	NH以下	13

OPIC結果の比較

- スコアが
 - ・ 上昇：29名（実験 23，統制 6）
 - ・ 低下：7名（実験 5，統制 2）
- 上昇割合（スコア変化合計÷人数）
 - ・ 実験群：34.8%
（A：35.1%，B：20.7%）
 - ・ 統制群：15.2% ※要旨訂正

アンケートの結果

- 自己評価：IL 30名，NH以下 69名
 - 全体として，自己認識では自己の能力を「非常に低く」見積もる傾向
 - スピーキング能力（英語によるコミュニケーション能力）への不安傾向
- 事後アンケートで，とくに能力が伸びたと答えるものは少なかった

考察

- 実験群と統制群の比較：
 - OPICレベルの向上にWeb&Skypeの学習効果が見られる
- 統制群のアンケート：
 - 自己評価は, Pre < Post
 - 事後でも伸びは実感していない

まとめ

- スピーキング学習の動機付け
 - 有能性を与えることが大事
 - 外部テストを受験することで、自己認識レベルと客観レベルのギャップを埋めることが重要
- 試験により有能性を高めることで、自律学習の効果がより高まる

ご質問・コメント

- 金丸まで
(kanamaru@hi.h.kyoto-u.ac.jp)